

## 南米ボリビアに関する現地調査およびリモート調査の報告

梅崎 かほり

アジア研究センターには、2018年度から共同研究「植民地国家と近代性:アジア諸国を中心とする比較研究」でお世話になっている。タイトルの通り、アジアを中心とする共同研究グループにありながら、私は南米ボリビアを専門としている。アジア諸国とは植民地化された時期も期間も、また独立の時期も経緯も異なるラテンアメリカを、アジア研究との比較対象として加えていただいた形だ。アジアについては不勉強な私にとって、定期的で開催される研究会は大変刺激的である。この場を借りて御礼申し上げたい。

私は2003年より、ボリビアのラパス県で現地調査を繰り返し、ボリビアにおける非先住民マイノリティ、アフロ系ボリビア人について研究してきた。彼らは、植民地時代後期に奴隷としてこの地域に動員されたアフリカ人の子孫で、白人主導の混血国家の形成過程において、その存在が不可視化されてきたマイノリティ集団である。先住民運動が盛り上がりを見せた1970年代を経て、1990年代に多文化主義を標榜する政権が登場する中、アフロ系ボリビア人たちもまた、被抑圧者としての歴史的立場からの脱却と、固有文化の復興と集団的アイデンティティの確立へ向けて動き出した。その一連の社会運動が私の研究テーマである。近年では、史上初の先住民大統領として脚

光を浴びたエボ・モラレスの多民族国家構想と、アフロ系ボリビア人の社会運動との関連性に注目してきた(梅崎 2018)。

2018年度以降の現地調査で行ったことは、主に以下の3つである。1つは、ラパス県におけるアフロボリビア社会の継続的観察。もう1つは、新しい研究テーマとして準備を進めている都市先住民のライフヒストリー研究の予備調査。加えて、2019年度大統領選挙およびモラレス政権の終焉をめぐる世論の調査である。

アフロボリビア研究には2017年の博士論文でひと区切りがついたが、これまで聞き取りをおこなってきた個人や社会組織を対象に、追跡調査を継続している。2019年2月の調査の際には、自身もアフロ系ボリビア人である歴史家アンゴラ氏の出身地、北ユンガス地方コリパタ区に同行し、同地域で収集されたオーラル史料と、それに基づき再現された保存食の加工過程を見せてもらった。また、同氏が地域史を語るラジオ番組の収録に参加し、オーラルヒストリー研究の成果を地域に還元する方法について議論した。ラパス市では、県が開催したアフロボリビア文化の保存に関する聴聞会に同席し、固有文化の保存と継承の重要性について当事者たちがどのように考えているか、またそこに行政がどのように関わっていくべきかの議論に立ち会わせてもらった(写真1)。

新しい研究テーマは、アフロボリビア研究で明らかになった都市・農村間の連帯と分断の問題を掘り下げるための比較研究として着想したものである。そもそも私がボリビア研究を始めた当初は、都市先住民の生活文化の重層性に関心を抱き、コチャバンバ県でケチュア語(アンデス地域で最大規模の



写真1 アフロボリビア文化の保存に関する聴聞会の様子